

自分に言う言葉

彦著作集
第九卷

片山敏彦著作集 9

© 1972 Misuzu Shobo

1972年6月30日 第1刷発行

¥ 1000.

著 者 かた やま とし ひこ
 片 山 敏 彦

東京都文京区本郷3丁目17-15
発 行 者 北 野 民 夫

東京都新宿区改代町24
印 刷 者 田 中 昭 三

発 行 所 東京都文京区 株式 み す ず 書 房
 本郷3丁目17 会社 電 話 814-0131(代)
 郵便番号 113 振替東京 195132

(第9回配本)

理想社印刷・鈴木製本

凡 例

一、本書は、一九一八年から一九六一年までの四十三年間に、片山敏彦が書き残した日記ふうのノートおよび原稿を整理編集したものであり、すべて未発表である。

全体の分量は、菊判ノート、大型手帖、大学ノートあわせてはば四十九冊、原稿用紙の形で残されたものはば二〇〇枚である。すべてを四〇〇字詰原稿用紙に直すと三〇〇〇枚以上になると思われるが、今回はそのうちから、原稿用紙で五二〇枚分を収録した。

一、旧かなづかいを新かなづかいにあらためたほか、用字、用語等はすべて原文のままである。ただし、人名などの固有名詞は現在の慣例に従った。

一、本文中……で表わした部分は省略を示すものであり、省略部分には、ドイツ語、英語、フランス語などの引用もふくまれている。

一、本文中の「」内の小活字および註は編者が付した。

一、巻末の年譜には多くの方々の御協力をえた。

目 次

I	青年時代	3
	——一九二八～一九二八年——	
II	ヨーロッパにて	89
	——一九二九～一九三一年——	
III	戦争前後	189
	——一九三一～一九四六年——	
IV	再び荻窪にて	273
	——一九四八～一九六一年——	
	年譜	315
	解説	319
	青木やよひ	

I 青年時代

——一九一八——一九二八年——

一九一八年（大正七年）

〔二十歳〕

十二月二十六日

……

俺は死ぬのだ。そのことは無限の前におけば、本当に近い将来に起るにきまっていることなのだ。命をかけて、生きようとせよ、一人の「人間」になる為に……

どこまで行けるかやってみろ。あそこまではとても行かれないことは運命がもしきめているとしても、行かれる所迄は行って見ろ、それにそれはきまっているとはきまってはしないのだ。くたばる所まで行け。あそこまで行くとしてもその道はやはり俺には今、迷っているこの日々の道より外にはあり得ないのだ。あのなつかしい人々の名前をもう一度思い出して見ろ、ゲーテ、フランシス、トルストイ、レンブラント、ベートーヴェン、ドストイエフスキー、ヘッベル、ユーゴー、ゴッホ、セザンヌ、ミケランジェロ、グレコ。

基督、釈迦のことをいうのは恐ろしい。

俺はくだらない怠け者でも確かにあの人々の永遠な、美しい魂に対しては、心の一番の深みから憧憬するものあることをみずから感ずる。……

……善と真と美とに対するあこがれよ、燃えろ、燃えろ、せめて短かい俺の一生に、死ぬ目迄は燃えつつけてくれ。

……

一九一九年（大正八年）

一月二十二日

今日も寒い風が吹いている。けれど美しい日だ。

吉田（泰司氏）から手紙が来た。脚本のよきプランと単行本のことで昂奮している。

自分はまだなかなか仕事を具体的に生めそうもない。しかし、もう決して失望はしない。ただ一生懸命に生きようとし、勉強してゆくより道はない。ヨブのように、しっかりと足を大地につけて、運命を愛し、運命に忠実であり、真剣でごまかさずに行くより道はない。そこにたしかに道は拓ける。世界中の人達がきちがいになって、戦争をし、獣のように血を流し合い、殺しあい、不合理と不公平の中に物質の勝利を歌おうとも、自分達は自分達の神を求めて歩いて行こう。……

二月十二日

……

ギリシャの彫刻の本を買った。驚ろく。むしろ *massive* する。美しい音楽を聞いているような気持だ。本当に何というしなやかな美しい、高い感じだろう。不思議な静かな夢に包まれているようだ。

俺はこれからだと本当に思わずにはいられない。どんなことでも自分にばかりは見限りはつけない。自分の中にどんな美しい可能性が眠っているか、俺はまるで知りはしない。自分自身に就いてはまるで知らないと言えな

い。

ただ自分を深く掘って行くことだ。きっと思いがけなくすぐれたものを掘り出せないことはないと思う。

俺はその宝玉を抱いて、地上を歩くのだ。そして一見、醜悪な汚れたものに見える人間の世の所々で美しい花と宝石とを、自分の心霊の光で深し当てるのだ。二つの宝石の間に生れる輝やきの中に俺は何を見ることを得るだろう。それと思うことこそたのしみだ。

多くの日本人や外国人のように、四十になるかならないうちに既に、生きたままのみにならぬ為に、俺は本当に今から、生きた根を心の地中深く培わねばならぬ。慌てはしない。一生の仕事だ。一步一步、歩かなくては崩れる仕事だ。怠けてはならない。この一日一日より外には何処にも真の俺の人生は無いのだから。

二月十九日

『ペレアスとメリサンド』を読んだ。

……心霊の動きはか弱く、美しく、しかも深い。マーテルリンクはあの中に、たましいの進化を書いたのだろうか。明るみへ出ようとして手さぐりしている、天使の苦悩と悲哀との感じだ。やはりあまりに本物だ。……

心霊と心霊との沈黙の中に於ける不思議な深い交渉、愛の微妙さ、心霊の扉の前に掛け出されて運命に押し倒される人間のくるしみ。

……

『アグラヴェーヌとセリセット』をまた読む。涙ぐんでしまう。何と重いくるしみに人の心が鞭打たれていることだろう。

この世に美があるということは本当にいいことだ。マーテルリンクは自分のたましいの師だという気がする。

二月二十五日

ホイットマンの『父よ、野より帰れ』を読んで涙が出た。おお、どんなにはっきりそのシーンが想像できるだろう。平和な、穀物のみだった、秋の田舎。老いたる父と母、戦争に行っているただ一人の息子の為に寝ても覚めても、祈る心づかい。戦地から来た手紙。

三月二日

.....

常に、自分のうちに聖なる火を燃え上らせて置きたい。

高い高い、厳かな王国にかかっている金色の星々と信号する力を持っているものは、ただ心のうちなる火の明るさのみの気がする。火を燃え上らせ、その明るさを強くし、焰の色を一層美しきものとなす為には、常によき燃料を具えねばならぬ気がする。内村（鑑三）氏の演説を聞くときや武者小路（実篤）氏の書いたものを読み、その仕事を思うときなどにも、本当になつかしいものを感じさせられるのは、やはりあの火の力なのだと思う。.....

三月八日

.....

マーテルリンク、ロダン、ストリンドベリーなどのことを考えると、真のシンボリズムの神秘と美とに触れられる気がする。真の象徴とはやはり、無限なるもの絶対なるものの姿の象徴でなければならない。永遠なるものの必然に表われた美しい、不思議なプロフィールでなければならない気がする。言葉の上のみの象徴主義が、人間の魂の

奥にまで触れ得る力がなくても苦情はいえない。

三月二十一日

何故人は姦淫により生れなければならないのか。何故もつと清い動機から生れる事ができないのか。何故人は他の動物を殺さずには生きて行かれないのか。何故人は憎み合い、戦い、汚し、殺し合い、偽り合い、傷け^{きず}合わねばならないのか。

何故、罪（悪）を犯す味は甘く、真理に従う道はけわしいか。何故、何故？

かかるくるしみは何の為に人類の上に課せられてあるか。イヴがアダムを誘惑したからか。イヴとアダムとが罪を犯した罰か。何故イヴはアダムを誘惑したか。蛇から誘惑されたからか。何故蛇が誘惑しなければならなかったか。何故神は蛇を創ったか。悪の存在もまた、神のみむねから出たのか、その事は確かなのか。悪も、神のみむねの中で善と手を握り合い、その姿を変じて安らかに眠ることができるのか、その事は本当なのか。

落ちて——如何に度々、その生活の中で人は落ちんとし、また落ちることであろう——ひそかに新しい希望と決心を生み出して起き上る人の顔に、天使の涙の灑^{そそ}れんことを。

五月十日

……

真理の星の高さは無限である。それを求めて旅立つ者は、昇り過ぎ、行き過ぎるということはないと思う。その星の高さに一度気がつき、それを目指して昇ろうとする者は先ず、直ちに如何に多くの苦しみと試練を迎え取らね

ばならない事であろう。それにはトルストイの一生が世にも偉大な莊嚴な——又、恐らくは、又なく美しいともいえる——血まみれの善き例をわれわれの前に残している。

真理をもとむる生活に、きびし過ぎる生活、禁欲すぎる生活などというものは存在し得ないと思う。

自分一個の生活に就いていえば、まだ真理の星の高さには気がついて、それに向って登ろうとする心の用意すらできていないのである。道の第一のけわしさと苦しさとは逢着する資格すらもないのである。歩き始めたい。是非歩き始めねばならない。……

五月十二日

おお、この胸の変な熱さ、

燃える希望、静かに湧くよろこび、

おお、聖なる汝らの故郷はどこなのだ。

生きよう、生きよう、自分のこの一つのたましいを

見知らぬ「彼」に捧げよう。

……

五月二十日

永遠、永遠！ 星、太陽、母なる地。

草、花、水、火、樹、人、動物。

悲哀、歡喜、生、死、神、愛、憎、天使、惡魔。

八月四日

いよいよ学校は落第した事がわかった。^{*}祝福された後一年間よ、俺は爰に自由になった気がする。今迄感じて来た空虚なある圧迫を、身をかかわしてうまくやり過してしまつた心持だ。これからは自分の仕えるべきものの為に十字架を負う決心をする。もう恐れはしないぞ。……

^{*} この年の七月に岡山第六高等学校第三部（医科）を卒業した二十歳の著者は、文学を志して上京したが、最初の大学入試に失敗した。

十一月十七日

うんと自己に誠実になり切りたい。

道と希望と、或るいい幻想とがや々と自分のものになり出したように思われる。自己に誠実になり切ることだ。当然、苦しむべき苦しみを決してごまかさないとだ。

ストリンドベリーは「神を求めて悪魔に出逢つた」けれど、それはストリンドベリーが自己に誠実な為であつた。やがて晩年には、あんな、深い真理と神の使徒としての静かさがおとずれて来たのだ。自己に誠実になり切れるとき、自己はもはや、自分一個の魂の中に閉じこもっているのではなく、より高い、よりサブライムな超絶的な自己に融和するのではないかと思う。福祉はそこに下るのではないのだろうか。

自己に誠実になり切るときには、今迄、自己にさえ未知であつたミスチックな可能性が自分のものとなるのだ。世界中の「自己」が皆、誠実になり、真理をいのり求めれば、世界のメヂウムは浄められ、深められ、高められ、今迄隠れていた、恵まれた可能性が示顕されるようになりはしないだろうか。

自分の中にも、思い掛けない可能性が、呼び醒まされる日を待っているのではないか？ そんな気がする。もしそうなら、それを呼び醒まさないで置く事は、自分をつくった者への冒瀆だ。きっと呼びさましたい。自分だけに与えられているたましいの味をこの世に寄与する事は自分の務めだ。自分を通して自分以上の所から命ぜられている務めだ。その務めの中には、生き甲斐や、霊的なよろこびが、自分の心に向って微笑し掛ける日を待ちつつひそんでいるのではないだろうか。

十一月二十五日

僕はアンジェリコに対するなつかしさが胸にこみ上げて来るようだ。何故だか、アンジェリコの絵を見ているとなきたくなるのだ。ハイムウェーを感じる。アンジェリコの絵は自分にふるさとの美と、そこからの遠い距離とを思わせる。パッハをきくとき涙を感じるのも、きっとそのたましいのふるさとの遠さと憧れとから来るさびしさなのだと今日思った。プラトン、ノヴァーリス、アンジェリコ、ジョットー、浄き都の優れた市民達よ！

十二月五日

同感のできる言葉だけなら誰にでもいえる。

大切なのはその言葉の裏に輝やく世界の大きさだ。その世界の深さこそは、書く人の魂の深さによるものだ。

その裏の世界の深さを伴わなければ、どんな立派な言葉も生命がない。キリストの言葉、トルストイの言葉を輝やかすものは、その沈黙の世界の偉大さだ。

言葉は、その偉大なサブライムな沈黙の世界の必然な切り口として表われる時、最も高く輝やく事を許される。

ベートーヴェンの音楽、レンブラントの絵画などはその最も善き例だと思う。

大事なのは、裏なる沈黙の王国を、より偉大な、より深い、より高い、よりサブライムなものとなすことだ。その糧は、ただこの地上の日常の生活の中から採集される。生活的に、うちを造り上げて行くより道はない。そしてそれを生理的に進めて行くより道はない。……

*

今夜は月と星がかぎりなく美しい。無窮の澄み渡った大空に、月と星との荘嚴な儀式は行われている。

それを仰いでいると、自分はこの地上の生活が平素想像するより、幾倍も神聖なものであることを思う。心に浮ぶものは、亡き祖母や、死んだ友の涙や微笑などである。過去にこの現象界を見棄てたそれらの魂が、自分の心にうちつれて蘇る為に、何故このような星の美しい夜を選ぶのだろう。そこに何かの理由があるような気がする。心は追憶と感動で一杯になり、目に涙がたまる、すると星はその光を涙ににじませて急に大きなものになる。

ああ、地上の生活を支えているものは——平素あまり気にもつかないけれども——荘嚴な美と徳との掟であるのだと思う。時々、日常生活の表皮が、或る不幸や、涙や、善き感動の為に破れると、これらの美や徳が我々の目の前に溢れ出る。そのようなとき人は、歓喜と感謝とに心を充たされるのである。

自分は夜の大空を飾れるかがやきを見つめていると、何故か、女性のたましいの温かさと偉大さとを連想する。献身的なその愛情とその宿命的な悩みとに考え及ぶ。星と女性のたましいとに何か内面的なつながりがあるのだろうか。女性のたましいに宿る永遠性と、無窮界の輝やける飾りとは互に相似たものを持つように造られているのだろうか。

星の群を見ていると、自分の内面的な生活に不思議な温かさがまして来る。われわれは孤独な生存ではないと思えて来るのだ。おお、そこに行われているのは宇宙の一大家族の嚴肅な進行なのだ。……